

Courrier de Séverac

セヴラック通信



第5号
2008
後期

日本セヴラック協会・会報

Société Déodat de Séverac - JAPON

2008年11月22日(土)
代官山エナスタジオ

《例会》

15:00-16:50

フルート六重奏

植村泰一 (1st Flute)、日比野久美子 (2nd Flute)、五百川伸子 (3rd Flute)、
西村 祐 (Alto Flute)、吉野裕子 (Alto Flute)、石川絵津子 (Bass Flute)

セヴラック (編曲: 石川絵津子) 《休暇の日々から》第1集より
〈古いオルゴールが聴こえるとき〉

Déodat de Séverac ; Où l'on entend une vieille boîte à musique

鎌田直純 (Bar) ・ 末吉保雄 (Pf)

「シャルル・ボードレールの詩による歌曲」

セヴラック 《梟たち》

Déodat de Séverac ; Les Hiboux (Charles Baudelaire)

デュパルク 《旅への誘い》

Henri Duparc ; L'invitation au voyage (Charles Baudelaire)

～休憩～

平原あゆみ (Pf)

石田一郎 《黄昏の林檎畑》《遠い祭》他

館野 泉 ・ 平原あゆみ (Pf)

セヴラック (編曲: 末吉保雄) 《休暇の日々から》第1集より

Déodat de Séverac: EN VACANCES 1er recueil

〈シューマンへの祈り〉

Invocation à Schumann

第1曲 〈お祖母様が撫でてくれる〉

I. Les caresses de Grand' Maman

第2曲 〈ちいさなお隣さんが訪ねてくる〉

II. Les petites voisines e visite

第3曲 〈教会のスイス人に扮装したしたトト〉

III. Toto déguisé en Suisse d'église

第4曲 〈ミミは侯爵婦人に扮装する〉

IV. Mimi se déguisé en "Marquise"

第5曲 〈公園での Rond〉

V. Ronde dans le Parc

第7曲 〈ロマンティックなワルツ〉

VII. Valse Romantique

館野 泉 (Pf)

末吉保雄 《いっぱいの子どもたち》

Yashuo Sueyoshi ; Plein d'enfant

《懇親会》

17:00～

セヴラック通信
Courrier de Séverac

第5号
2008
後期

目次

〈特集〉石田一郎

石田一郎インタビュー●濱田滋郎（文）————— 02

〈連載〉セヴラックを伝えた日本語文献 その2

「音楽新潮」デオダ・ド・セヴェラック 現代佛蘭西の農村作曲家

●ランドルミイ（文）————— 08

〈連載〉セヴラックと私●末永理恵子————— 014

第10回例会の報告●亀田正俊————— 016

第11回例会プログラム 表2

NEWS 表3

編集後記 表3

〈特集〉 石田一郎

日本でセヴラックの音楽が好んで聴かれるようになったのは、意外に早い時期だったかもしれません。たとえば明治42年生まれで来年1月に生誕100周年を迎える石田一郎氏(1909-1990)は、セヴラックをこよなく愛した作曲家でした。管弦楽曲「五つの神話」やピアノ四重奏曲、チェロ・ソナタなどを作曲した石田氏には、《北国》というピアノ組曲があり、この曲にセヴラックの影響を強く感じる、という人もあります。

石田氏は1932年から音楽雑誌「音楽新潮」(十字屋楽器店内音楽新潮発行所)の同人でした。この音楽誌は1936年2月号にセヴラックについて大きな紹介記事を組んでいます(08ページ参照)。石田氏は、この記事の作成に関わっていたかもしれません。

この号では、濱田滋郎さんが1977年に石田一郎氏にインタビューした「現代ギター」誌の記事を再録します。本協会の濱田滋郎さんや館野泉さんとも交流があった石田一郎氏の人となりや文章からうかがえます。

石田一郎インタビュー

『現代ギター』1977年7月号「ギターと日本作曲家」より

濱田滋郎(文)

お言葉に甘えて辻堂(東海道線)の駅から電話をすると、程なく白いフォルクスワーゲンが私たちを迎えに来てくださった。白髪をいただいておいでだが、とてもご壮健にお見受けする奥様が、運転席からにっこりされる。「海の近くでブラウン管が錆びてしまわない程度ぐらいのところ建っている家なんですよ……」と話される間に、ワーゲンは、松の木にノウゼンカズラがまつわった(しかも、それでスッキリと見える)門の前に止まった。

父の音楽好きが影響

石田一郎氏は、まるで年来の知己でもあるかのように、親しく、飾り気なく、私たちを書斎へ迎え入れてくださった。「堅型だったのを、やはりグランドがよいと思って入れ替えたら、なんだか狭くなりましてね」と言われるピアノは、シックな茶褐色。「いやあ、ヤマハにも輸出用にこういう色があるんですよ。黒だとどうしても感じがきつくなるでしょう」と微笑される。氏のうしろの棚は、どうやら楽譜らしいものが一面につまっている……

——石田先生のご出身地はどちらでしたか。

石田氏(以下、**I**) 秋田なんです。秋田市から1里ばかり離れた土崎という港で、今は秋田市に併合されておりますね。そこで生まれて〔註、1909年1月24日〕十五、六歳のとき東京へ出ました。たいへん怠けた中学生で、これじゃどうにもなるまい、と親父が——中学の教師だったですけれども——明日からお前、学校へ行かなくてもよろしいと、東京へほうり出されちゃったんですよ(笑)。

——それは、音楽の勉強にですか。

■ ええ、ピアノの勉強に〔註、ピアノは高折宮次、田中規矩士の両氏に師事された〕。家の親父というのは、たいへんディレクタントなもんでしてね、自分の好きなことしかやらない教師だったんです。地主の長男に生まれたもんですから……。だいたい非生産的な家系なんですな（笑）。親父は音楽が好きで、レコード・コレクションにこつていまして、私も十五、六の時にはドビュッシーなんか聞かされていました。当時ですとドビュッシー、ラヴェルが「現代音楽」になったわけですね。

—そのころの日本人としてはめずらしいかたですね。

■ 親父のコレクションの中には、オペラというのは少なかったんです。それで私は、今でもオペラにあまり興味が湧かないですよ。器楽、室内楽ですね。そういうふうで、私は身体が弱くもあり中学へ1、2年遅れて入りましてね。そのあいだに、もうなまって詩を書いたりばかりしていたものだから、親父もねをあげたろうと思うんです。教師のくせに（笑）。

—それで、東京へ出られて……

■ 東京へ出て次の年でしたか、フランスからアンリ・ジルマルシェックス（Henri Gil-Marchex）というピアニストが来たんです。先年亡くなった薩摩治郎八さんの推せんで、フランスから派遣されてきたピアニストなんですが、たとえばラヴェルの「スペインの時」というのがあるでしょう？ あれの中の「五時のフォックストロット」というのを日本で初演されたようなかたなんです。古典から現代までの曲を1週間連続して演奏されたんですが、それまでドイツ系の音楽ばかりを聴いていたものだからすっかりびっくりして、えらく感激したわけなんです。それから作曲をやりたくて仕様がなくなり、ピアノの方をさぼり始めたんです。

—はじめはピアニスト志望でいらしたんですか。

■ 親父はそのつもりだったらしいですがね、私は人の前へ出るのがあまり好きでなくて、ひとりで絵を描いたり、詩を書いたりするようなタイプでしたから。

—年代にすると、それは何年頃でしょう。

■ この前もちょっと調べることがあって当時のプログラムを出したんですが……〔と、まるで雑誌のように立派な昔のプログラムを手に取り、年代を探される〕ああ、1925年です。このジルマルシェックスは作曲もやってますね。「吉原の朝帰り」なんてピアノ曲もありますよ（笑）。

—イキな人だったんだなあ。

■ 大正時代にあったでしょう、あのお鍋みたいな帽子をかむってね……。そのプログラムは、すごいものでしょう。曲目もクーラン、リュリあたりから始まって。

—じつは、私が石田先生のお名前を知ったのは、まだ10代の頃でしょうか、リュリとかラランドとか、フランスのクラヴサン音楽ばかり集めた曲編を編纂されたものなんです。〔後註、1951年、創学社刊『フランス古典ピアノ曲集』〕あの曲集の序文にもジルマルシェックスのことを書いておられましたね。

■ あれは私が若い頃、楽譜が欲しくてたまらなかった曲ばかりなんです。そうした頃、駿河台下の裏通りにパンテオンという楽譜屋を見つけたら、そこにフランスの曲がたくさん入ってましたね。そのオヤジさんはフランス語ペラペラの奇人なの。そこで『クラヴ

シニスト・フランセーズ（フランス・クラヴサン楽派）』という4冊の本を見つけまして、その足で大森の親父のところまで引返して、またお茶の水駅から駆けて買いにいったね……あんな嬉しいこと、なかったですね。

——その頃はお父さんも東京へ出ておられたわけですね。

■ ええ、東京へ出るため、私に下準備させたようなところもありますね（笑）。

——そういった、思い出の曲を刊行されたわけなんですね。

■ 戦後の何も買えない頃だから、興味のある人には喜ばれたようでした。

——本当に、ほかにはなかったですね。ちょうどあの頃ですか、フランスからラザール・レヴィイというピアニストが来て、クープランの「葦」とか「百合の目ざめ」なんかもひいたんですね。そんな曲が入っているので、とても嬉しかったのを覚えています。

■ その4冊の楽譜は、思い出があるので、いまだにもっていますよ〔と、なつかしげに取り出される〕。

——先生は、音楽学校のようなところには行かれませんでしたか。

■ ええ、全然……と言ってもわるいかな、深井史郎〔作曲家、評論家 1907-1959〕が私の先輩で、秋田中学のとき一緒に童謡の雑誌を出したりしたんですが、彼にすすめられてちょっとのあいだ音楽学校へ通いましたけれども、あまり身体の調子がよくなくて、1学期でやめました。

——お丈夫ではなかったんですね。

■ ええ、あまり丈夫ではなかったし、たいへん好き勝手な生き方をしてしまいましたね。戦後になってからラジオを聴いていたら、偶然、山根銀二さんが「この人は戦前からよく書いていた人なんだけれど、独りでコツコツやって来た人なのであまり知られておらず、新しい作曲家じゃないかと思う人もあるだろう」と言っておられるので苦笑したんですが。

——それで、作品第1番を完成されたのはいつでしょうか。

■ 私は作品に番号をつけていないんです。いやになると捨てていっちゃうから。でも、いちばん最初に発表したのは歌の曲、これです……〔と差し出された古めかしいプログラムには〈景山枚子第六回独唱会、ピアノ伴奏フレッド・ゲエリイ、1933年〉とあり、曲目の中に山村暮鳥詩の「賦」、田中冬二詩の「三月」「ふるさとにて」と、石田一郎作の歌曲が3篇見える〕

——現在まで、破らずに残されてある作品はどのぐらいお持ちなんですか。

■ そんなにないんです。歌はわりあい多いですね。私は若い時から友達に詩人が多くて、馬込に住んでいた頃から、北園克衛とか、亡くなった城左門とか……。その時代には、山本周五郎とも毎日、遊び呆けていたもんです（笑）。〔註、フルート曲のひとつは山本周五郎に捧げられている〕

——そうですか。思いがけない結びつきですねエ。

■ 音楽家の友達はいなかったんです。馬込というのは元来、文人とか画家が住んでいて、私もそんな中へ入っちゃったんですね。向うの丘には室生犀星、もうちょっと向うには小林古径がいたんです。そのほかいろんな人がいて、私のところが溜まり場みたいになっちゃった。親父もまた、それが平気でしたからね。あの日本人離れた詩を書く北園克衛

ともよく遊んでいたんですが、かれは、私がTBSを退職した記念演奏会のときにプログラムの製作を担当してくれました。それが、じつにびっくりしたんですが……お見せしますよ〔と、探し出されたプログラムは、およそ傑作なものである。編集部Hさんの上手な表現を借りれば“ギター弦を入れる袋ぐらいの大きさ”（よりよく言えば小ささ）に切った四角の色紙——オレンジ、赤、黄、青、中間色など色とりどり——が一組につき十何枚、綴じもせず、ちょうどギター弦袋みたいな袋におさまっている。私たちはつくづく眺め、嬉しくなってしまう〕。

■ ……こういうものを作ると聞いたときは呆れかえって「好きなようにやってくれ！」と言いましたよ（笑）。

——世界に二つとないプログラムでしょうねえ。

■ その曲目の中に、北園の詩に作曲した「夏の手紙」というのがあるでしょう。四つの短い詩からできているんですが、それに、シンフォニーの四楽章のように四つのべつべつなキャラクターをつけて作曲したんです。野村光一さんが聴いて、えらく讚めてくれましたよ、こんな歌曲は初めてだって言って……

——このコンサートは1964年ですね。歌と室内楽が演奏されていますけれども〔註、フルートとピアノのための「ソナチネ」「昔噺」「祭の笛」、北園克衛、田中冬二、城左門の詩による歌曲、チェロ・ソナタ、ヴァイオリン・ソナタ第2番、ピアノ四重奏曲第2番など〕このあたりが石田先生の代表作と考えてよろしいわけですか。

■ そうかもしれませんね。

——管弦楽曲というのは……

■ マンフレッド・グルリットと亡くなった斎藤秀雄さんが初演してくれた「日本の神話」という曲があるんです、これは鈴木三重吉の『古事記物語』から書いてみたんですが。ほかに「祭り」という曲もありますが、とくに戦後は室内楽が書きたくなってね。

——こうしたお作は、レコードになっておりますか。

■ いや、なっていないですね。

——楽譜は手に入りますでしょうか。

■ 出ていますよ〔と、数冊、テーブルの上に出してくださる。中の一冊、ピアノ曲集『北国』（全音刊）を手にとりながら〕この曲集の中から、館野泉君が数曲ラジオでひいてくれました。

——そういうかたが多く出て、私たちが先生の音楽にふれる機会を増やしていただかねば……

■ いやいや、私にはこんにちの前衛的なものは書けません。今の若い人の音楽には、ついていけないですよ。

小倉俊氏にすすめられて

——お若い頃から影響を受けられた作曲家というと、誰でしょう。

■ たとえば、デオダ・ドゥ・セヴラック、音の感覚の面でしょうね。ルーセルだとかフランスク派の人たち、それにやはりドビュッシー。ドビュッシーの影響から抜けるのに、えらい苦労をしたですよ。こわいですね、ドビュッシーという人は。私はテオリー（音楽理論）は、大沼哲という軍楽隊の隊長に習ったんです。この人は、ヴァンサン・ダンディの弟子でね、

日本陸軍の軍楽隊はギャルド・ルプビュリケーヌの編成でしょう、教官もフランスから来ていたもんです。ソルフェージュもフランスのラヴィニャックのを使って……

——その頃の日本の音楽教育はみんなドイツ流かと思ったら、フランス式もあったんですね。

■ そうなんです。……ところで、いちばん初めにギターの曲を書いたのはね、戦後、私東京放送（TBSラジオ）にプロデューサーとして籍をおいていたんですが、そこへ小倉俊さんがたずねて見えて、ギター曲を書いてみないかとおっしゃったんです。小倉さんは、私の書いたチェロ・ソナタ、これは音楽之友社「世界大音楽全集」の『日本器楽曲集（器楽編75）』に入っていますが、これをごらんになって、この人ならギター曲が書けるんじゃないか、ということで見えたらしい。ぜひ書きなさいよ、というわけで、おだてに乗って書いたんですが、なにしろ楽器をあまり知らないでしょう。ただ、私の姪がギターをひいていて、しょっちゅう楽器をもって遊びに来ましたから、まあ、音は知っているの、書いてみようかな、と思ったわけです。小倉俊さんが、日本楽器で「ギター・ノート」というのを出しておられましたでしょう。

——そうですか。

■ 4ページのもんですが、それに小品を三つばかり書かされたんです。まあ、ひけるならいいし、ひけなかったら直してください、と言って書きましたね。ギターがわからないから、ポジションを図表にして、ずーっと書き出したもんです。

——それはもう戦後のことですね？

■ ええ、その譜面もありますよ〔と、戸棚からくだんの「ギター・ノート」を取出される。Editor: S. Ogura として、1955年12月号および1956年1月号、4ページの小型パンフレットながらいかにも小倉氏らしい筆でギタリストにとっても有益な知識がこまごまと記されており、どちらも最後の1ページに石田氏のギター用小品（小倉氏運指による）がのせられている〕。

——これもまた、貴重な資料ですねえ。昭和30年……

■ そのあと、暇ができたとき小倉さんのためにコンチェルティーノみたいなものも書いたんですが、恥ずかしくてあとで破ってしまいました。

——いや、じつは、日本で最初にギター協奏曲を書かれたのは、先生じゃなかとないまして。

■ 小倉さんがどこかに書いたかな。

——亡くなられた松本太郎先生が、「現代ギター」にのせられた記事の中で拝見したんです。その曲は、もう破棄されてしまったわけでしょうか。

■ いや、とても恥ずかしくて世間に出せないから。

——それは、でも勿体ないなあ。

■ そのあと、いろいろギター曲を書いてみたんですが、ギターというのはつくづくむずかしいです。いろいろと思いがけない効果があつてね。全音から出た『日本の歌』という曲集に入っている「三つの小曲」あたりかな、自分でもギターらしいと思うのは。

——その曲集なら今、ここにもって参りましたけれども。

■ ああ、そうですか。それはコロムビア・レコードから頼まれて、編曲という仕事は苦手だから誰かほかに、と言ったんですが……オリジナル曲が2、3入ってもいいからとまで

言われて、とうとう引受けちゃったんです。

——これは松田（晃演）さんがレコーディングされましたね。

■ ええ、あのレコードは売り切れてしまったらしいですね。やはりその頃かな、北岸和男さんという、松田さんのお弟子のギタリストと知り合いました……

——全音からピースで出ている先生の「秋」という曲、これに運指をつけていられる方ですね。

■ そう、そう。その人のところへ、家の姪が習いに行っていましたね。藤沢の方に居られて、ときどき家まで訊ねてみえたんですよ。最近はずっと会っていませんが。……それにたしかフルートとギターの曲もありましたね。松田さんが軽井沢の音楽祭で初演しているんじゃないかな〔と、ご自身の作曲が演奏された会のプログラム・ファイルを取り出して調べられる〕……ああ、これだ、1972年ですね。松田さんのギター、旭孝さんのフルートで初演になりました。「今昔物語による三つのプレリュード」というのです。

——ぜひ、もっとギターの曲を書いていただかなければ……じつは、今日は「協奏曲」を“発掘”して帰ろうと楽しみにしてきたのですが（笑）。

■ いや、ご要望があれば、また新しく書きおろしますよ。室内楽ぐらいの編成で書いたら、おもしろいものができるでしょう。

——せっかく、ギターのことを勉強されたのですから（笑）……

■ 私は楽譜集めが好きでね、ギターの曲もよく買い込んで見るんですよ……ルーセル、タンスマン、それにヴィアラ＝ロボス〔と、ジョルジュ・ミゴのめずらしいギター入り室内楽やウジェーヌ・ボザの小協奏曲にいたるまで、氏はスコアを出して見せてくださる〕

……以上のような要約は、初夏の午後、石田一郎氏のもとに私たちの味わった、まだまだ多くの美しく貴重な時間についての記録を逸してしまうことになるのだが、致し方ない。愛する詩人たちについて、詩集について、なお数々のことを氏は語られた。「放送局で資料室にいたからですよ」とさりげなく言われながら、みごとに整理された楽譜コレクション——とくに私の望んだセヴラックの作品など——を見せてくださった。ピアノ曲「子守唄」*（「北国」より）や、歌曲「梨の花とお寺の奥さん」**を、レコードで聴かせてもいただいた。現在取りかかっている、フルート、オーボエ、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロと魅力的な編成をとる五重奏曲や、「虚無僧の気持ちを表現したいと思って」と洩らされた無伴奏チェロ曲の譜面も、たいそう興味深かった。

「さいわい良性のポリープでしたが、最近のどを手術したら声がかすれて」と言われる氏に、心なきをお詫びをしながら、つい暮れ方近くまでお邪魔した私たちを、ふたたび奥様がワーゲンで送ってくださる。しかも、こんどは片瀬江ノ島駅まで「海が見られますからね」と、ご夫妻は私たちの恐縮を和やかな微笑みで包み込まれた。

* 全音ピアノ・ピースによる名曲集=5（コロムビア ELS-3145）ピアノ：神西敦子

** “第15回芸術祭参加”現代日本歌曲集Ⅱ（コロムビア AL3031）歌：戸田政子、ピアノ：福森湘、監修：富樫康「音楽新潮」一九三六年

セヴラックを伝えた日本語文献 その2

私たちのセヴラックが日本でどのように紹介されてきたか、文献から探る試みの第2回は音楽雑誌「音楽新潮」の記事からです。

「音楽新潮」は、大正13年に十字屋楽器店によって創刊され、昭和16年の雑誌統廃合で廃刊されるまで、読み応えのある音楽評論を掲載し続けました。1936年の2月号では、11ページも割いてセヴェラック（セヴラック）を紹介しています。ここではその前半部分を収録します（後半は次号）。

執筆者のランドルミイ（ポール・ランドルミー Paul Landormy, 1869-1943）は、フランスの作曲家、音楽学者、評論家です。哲学と声楽を学び、ロマン・ロランにも師事したようです。後にパリ大学の音楽史の教授となり、また《Le temps》紙や《Le victoire》紙に音楽批評を寄稿し、著書の《西洋音楽史》は柿沼太郎訳で日本でも出版されています（1926年、十字屋楽器店）。

以下の文章の訳者「T.K.」は、いったい誰なのでしょう？ 読者の皆さんの推理を募集します。

デオダ・ド・セヴェラック

現代佛蘭西の農村作曲家

巴里 ランドルミイ

ドビュッシイとオネガアをつなぐ環はモオリス・ラヴェル、アルベエル・ルッセル、デオダ・ド・セヴェラック及びフロオラン・シュミットであつて、全体が一時代にメムバアである。此の人達は我々がドビュッシイの藝術として承知する間色、陰影、発散的環象の藝術と、もとの「六人」及びその倍数の人達の粗野にして清新な、強力な藝術とを分ける線と経過をなしてゐる。彼等はそれぞれ独自の方法を以て印象主義の凋落を助成した。さうして恐らくは意志に反するところではあつたらうが、オネガア、ミロオ、ブウランク及びその部下の招来を取次いだのであつた。

ラヴェル、ルッセル及びフロオラン・シュミットは世界的な名声を得た。デオダ・ド・セヴェラック—— Déodat de Séverac ——はそれほど知られてゐない。が充分に値する。音楽家の中でセヴェラック位我々を魅惑し、我々の心と想像を動かし得る人はない。だが、彼は管弦楽や舞臺の為に殆んど書かず、彼の最もめざましい作品は、若干の歌曲を除くと、凡てがピアノ曲である。かうして彼が親しく話しかけた聴衆は限られてゐる。それに彼はあまりに若くして死んだ。

彼を正しい位置に置き、彼の音楽の高貴な性質を公平に評価するのが私の目的である。

（デオダ・ド・セヴェラックをもつと綿密に研究したいと思はれる諸君に取つて参考とすべき基礎的な著書は有名な洋琴家で、セヴェラックの友人でまた最も親しく彼を知つてゐたブランシュ・セルヴァの研究である。女史はセヴェラックに就て極めて炯眼な著書を書いた（ドラグラウヴ出版）

デオダ・ド・セヴェラックに接した人達は誰れもかも心持ちよい印象を受けてゐる。敏感な心、極めて善良なまた寛大な心を彼に見た。直接自然に接触し、自然及びそこに発する無数の音響から直接靈感を受けて作曲した、音楽の中にのみ生きた虚心な夢想家を彼に見た。彼は田舎の一隅、ルッション——地中海とピレネエ山脈に接する南佛蘭西の片田舎——に屬する部落民の息子で、そこを離れるのを苦痛とし、またそこに帰えるのを悦びとして、生涯の大部分をルッションに送り、故郷の精神と相通ずる藝術にのみたづきはつた人であつた。彼は驚くべき発明の富をもつ即興家で、紙の上に書いた作品よりも無限に多くの作曲をした。彼の友人の一人はかう述べてゐる。「丁度死の年だつた。セヴェラックは私に「セルダニア」にも匹敵する価値をもつ、すばらしく美しい組曲全体を聞かせてくれたが、これは書き下ろされず、そのまま彼がもち去つたものだ」他にも彼の豊富な想像の中に住み、彼が紙の上に書き現はす労を取らうとしなかつた作品が澤山あることは疑ひない。

セヴェラックに取つては、作曲することはあらゆる楽しみの尤なるものであつた——不
断の楽しみと云つてもいいだろう。彼は何かの音楽を夢みつけた。

デリケートな感覚の人、それでゐて世間一般の人達と親しみつけた彼は、ドビュッシィに無限の喜びを与え、同時にうぶな民衆にも訴へることが出来たのであつた。彼は民衆を愛した。土地の農夫や労働する人達の中にもて、彼等と話すことを好んだ。彼等も亦彼を非常に愛してゐた。セヴェラックの名声は最も貧しい人々の間にすら占めてゐた。彼の死はルッション全体に哀悼を撒いた。

セヴェラックは巴里に來た時、畠違いで落ち着けなかつた。オペラ・コミック座での「クウル・デュ・ムウラン」の下稽古にへこたれて、オーケストラの楽手達が「駄目だ！この音楽を書いた人ぢあない。どうしていいのかわかつてみそうにも見えない」と云つたくらひぼんやりしてゐた。

セヴェラックは自然及び貧しい人々に対する愛で、心優しいラ・フォンテエヌに似てゐた。夢の中に日を暮らし、一見世間を忘れてゐるやうだつた。だが時折茶気満々、非常に愉快になり、すばらしい道化者になる、また一方で眞面目な男らしい情緒の大衆的な波に熱心に加はる事も出来た。例へばアルミスティスの日には彼の村では楽隊を先頭に夕暮の町を練り歩く行列が行はれた。ところが貧弱な町の楽隊は金に困まつてゐた。若い人はみず、年寄りも少なかつた。で低音部が足りなかつた。デオダは大きなチューバを抱へ込んで行列に加はつた。彼は吹きながら、気が狂つたやうに吹きながら、町中を練り歩いた、大戦前の古い兵隊服を着て、巡査の帽子を横つちよにかぶり、喜びに心をときめかしながら……

* * *

ド・セヴェラック家は佛蘭西でも最も古い家柄の一つである。聞くところに依ると、羅馬皇帝に任へたセヴェレスと称する将校の後裔である。家系はアラゴンの王家とつながつてゐる。八世紀以後、セヴェラックはラングドックに定住した。セヴェラックの曾祖父はルイ十四世の世の海軍大臣であつた。

だがかうしたことは凡てデオダ・ド・セヴェラックが単純そのものであることを妨げな

かつた。その風采挙動からのみ見ると、彼は田舎の小ブルジョアとしか受取れなかつた。

セヴエラックは一八七三年の七月二十日サン・フェリックス・ド・ロオラグエに生れた。カレエヂュ・ド・ソレエズにてアカデミックな教育を終つてから、トウルウズで法律の勉強を始めたものの、間もなく止めてそこの音楽学校で音楽の練習を始めた（一八九三年—一九六年）一八九六年に、彼は巴里音楽院に入学した、が僅か数ヶ月みただけで、スコラ・カントルムに移つた。シャルル・ボルドに見抜かれて引き寄せられたのであつた。事実、ボルドはポウル・プウジョオに書いた「私は今例外的な青年を見つけた。「シャントウル・ド・サン・ヂェルヴェ」のポアイエ博士の紹介で田舎貴族の後裔で、まだほんの少年だが、自然な、うぶな、抜目のない、本当の元気者、指の端まで音楽家、藝術家、詩人——田園劇に現はれる一人物です。御覧になれば、貴君も私同様彼が好きになられることでせう」と。

一八九六年から一九〇七年までまる十年間、セヴエラックはヴァンサン・ダンディーの下で作曲を学んだ。オルガンではギルマンの弟子であり、対位法はマニヤールに就いた。ボルドは彼のパレストリーナの作品演奏の合唱稽古をまかせた。

一八九七年に、セヴエラックは数ヶ月の間に父と妹マルトを失ひ、痛ましい試練を受けなければならなかつた。此の死の悲しい思ひ出から、数年後にあの微妙な「春の墓地の一隅」が生れた。

スコラ・カントルムで、セヴエラックはオーケストラの各楽器の技巧を学び、オーボエ、ホルン、トラムペット、フリユート、クラリネット等々のクラスをそれからそれと渡り歩いた。

彼は「ルネエサンス・ラティーン」「メッサアヂェ・ド・トウルウズ」「オクシダン」の諸誌に批評を試みた。重要な音楽会、特にシャルル・ラムルウの音楽会をかかさず聴いた。彼はドビュッシィの「ペレアスとメリサンド」、ムウソルグスキーの「ボリス」、ダンディーの「外国人」に拍手した。フォーレの魅力に捕はれた。

ブリュッセルの「リーブル・エステティック」の炯眼な主幹オクターヴ・モオスは一九〇二年にセヴエラックの「地の唄」の初演を行つて、此の若い作曲家を世人に注目させた。

パリ及びブリュッセルのやうな大都会はセヴエラックを無頓着に迎へたに過ぎなかつた。彼は故郷を、サン・フェリックスを夢見てみた。彼の澄んだ深い眼差、日焼けした赤銅色の顔、屬々夢見る如き風采は都会生れの人のそれではなかつた。彼は口数が少なかつた。彼は内心の幻影に幸福にほほえみかける思ひ出と風景とに満ちた幻影に耽つた。さうして休暇にルッシオンに帰省して、何の予定もなしに足にまかせて歩き廻り、路傍の宿屋や友人——訪ねて来ることを決して拒まない——の家に手足を伸ばすことが出来た時の彼の悦れしき！ 彼はいつまで滞在しようとするのか。一日か、二日か、一週間か。自分にも分からなかつた。或る美しい朝、何の沙汰もなしに、彼は出発する、がいつも後に何かを残して行くのだつた。彼は独りで出かけなかつた。かうした即興的な旅にはきまつて彼自身同様愉快的な、目の朗らかな、足達者な連れがあつた。

遂に巴里を「大都会」を去る時が来た。スコラ・カントルムでの研究は終つた。一九〇七年の六月、彼はクラスに対する告別の辭として「音楽の集中化と小禮拜堂」と題する小論文を書いた。これはたしかに風変りな論題だ！ その中で、セヴエラックは大地へ、太

陽へ、光へ、父祖の棟木へ帰る必要を述べようとした。彼は巴里で考へられてゐるやうな藝術家の生活に、その不要な雰囲気、なかでも徒当や党派に、対して戦を宣告した。彼自身には常時の人々の承知してゐた《垂直派》も《水平派》も眼中に無かつた。彼にはドビュッシィとダンディーのどちらも擇ぶ気がなかつた。彼は発見した場所や出所の如何を問はず、美しいものなら、轟然なしに嘆賞した。それに彼は先生ダンディーの弟子達の方向を取違つた熱心と近視眼な知識を指摘し、同様ドビュッシィの弟子達の偏狭と盲目を指摘する勇気をもつてゐた。

かうしてセヴェラックは簡単に独立を宣言し、如何なる流派、仲間、グループに加はることも拒んだ。彼はスコラ・カントルムの授業を受けた。彼はこれを自由に役立てようとした。さうして彼は田舎へ去つた。

「労働者達は再び従順な牛を追つて靜に、だが勢当るべからざる働きを始めた。ピレネエの山脈は青白い虹とダイヤモンドに輝いてゐる。夜明け方、カニグウ山は昇る陽に秋波を送る……私自身はと云へば、ゆつくりと悪意をもたずに仕事をつづける。」

と彼は書いてゐる「悪意をもたずに」とは美事な表現だ！ 此の独立の精神、かくも自由にして寛大な心には潜在的な敵意に縛られた我儘な藝術の乗ずる隙はない。セヴェラックは他の多くの人達と違つて、「誰れかに反対して」音楽を書かうとする欲を感じなかつた。

一九〇九年には巴里オペラ・コミック座で「クウル・デュ・ムウラン」（粉屋の心）が初演された。これは成功を以て迎へられ、カルロオ、ラロ、ブリュノオの如き批評家の歓迎するところとなり、就中ガブリエル・フォーレの特に洞察的な同情ある批評を得た。

次いで幻想と色彩の富をもつピアノ曲「太陽に浴みする女達」「セルダアニア」が出版されることになつた。セヴェラックは当時プウヴィヨンの物語に據る「レ・ザンティベル」と題する抒情劇を書いてゐた。友人マルク・ラファルグが臺本を書いた。彼はまたピアノと管絃樂の「葡萄の収穫」合唱とダンスと一緒に上演させようと夢想してゐた大交響曲「地中海」をも練つてゐた。だが此等の作品は彼の頭の中に生れただけで、紙の上に書かれなかつたし、死後何にも発見されなかつた。

一九〇一年に、セヴェラックはベヅィエのアレーヌ座にて抒情悲劇「エリオガバール」を上演、カタロニアの「コブラ」と云う素朴な樂器をオーケストラに加へたが、此の樂器の粗野な、不機嫌な、刺すが如き、スリルな響鳴性はフォーレとピエール・ラロの熱酔を起した。アルフレード・ブリュノオはこれに就て「まことに嘆賞すべき、壮大な、高貴なまた単純な作である。その豊富なまた完璧なあらゆる頁は論理と正確と不思議な表現力とを併はせもつてゐる」と書いた。

一九一二年には、ヴェルハアレンの「スパルタのヘレン」につけたセヴェラックの音楽が巴里で演奏された。

一九一四年に始まる大戦の間に、セヴェラックは健康を害してゐたにもかかわらず、戦闘員として参加しようとした。が兵籍を拒まれ、漸く病院の看護手になることが許された。彼は病人の世話をしてゐる中に自身も病気にかかり、それから一八年まで患者であつた。彼は殆んど作曲しなかつた。が絶えず音楽家を夢みつづけた。彼は既出版された作品を訂正しようとした。「セルダアニアには私の凡らゆる作品と同様、或る展開が長過ぎ、

不用な暇潰しがある。……私はこれを壓縮しようとしてみる」と自己を批評してゐる。彼はプランを立て、将来の幻影を抱いてゐた。だが気の毒な藝術家はその後しばらくしか生きてゐられなかつた。彼は一九二一年に此の世を去り、彼のあらゆる友人、彼を知つてゐた或は彼に会つたことのあるあらゆる人々、彼が住んだあらゆる小都市、彼が褒め称へられ、彼が人気を博した南方のあらゆる地方から哀悼を寄せられた。

セヴェラックは彼の故郷のものであつた最初のまた最後の人であつた。彼はそこを深く愛し驚くべきほど巧妙に表現した。彼はセルダニア——セルダニエ（ピレネの傾斜地）と西班牙のカタロニアで非常に流行るダンス——を、カタロニアのコブラ（楽器）を、戸外の大気の中で行はれるあらゆる音楽と舞踏を愛した。セヴェラックをよく知つて居り、また彼の音楽の最もすぐれた演奏者の一人であるブランシュ・セルヴァは此の点に就て述べてゐる。

「デオダは美しい音楽ならざる或るものを、藝術品ならざる或るものを愛した。彼は粗野な金管楽器のブカブカやる音を、太鼓のドンドン……器械ピアノのカチカチを、オルゴールの舊式な甘酸っぱい音を、無能な指と無情な心に投げやられた古いピアノのひび割れた不協和な音を好んだ。……デオダは、みじめな貧乏ヴァイオリン奏きが、あくどく飾り立てたカフェーに坐り込んだ冷淡な酔客を相手に、意気地もなく恥も外聞も忘れて、これ見よがしに奏くセンチな楽句の如何はしい氾濫をさへ楽しんだ。……これは善良な、憐み深い、本当に人間的なセヴェラックの心がかうした音楽的な骨董品に触れたが為であつた。……眞の藝術家の感受性が此等のみじめな、賤しい物の表面的な見苦しさの下に、その中に隠されてゐるだろうところの眞に美しいものの暗示を発見したからであつた」

* * *

ヴァンサン・ダンディーの弟子ではあつたが、デオダ・ド・セヴェラックの作品にはダンディーの精神もフランクの精神も跡づけられてゐない。

セヴェラックは神秘家でも、浪漫主義者ですらもなかつた。また充分に発展した音楽の大建築の技師でもなかつた。彼は対位法や多音音楽のあらゆる材料を使ひ盡してはゐない。彼は決して交響曲を書かなかつた。ピアノの組曲——「地の唄」「ラングドックにて」「セルダニア」（此等は彼の最もめざましい作品で、彼の特徴を現はして遺憾がない）——に於て、我々は何を見出すか。力強く表現された自然との感応、大地の身に沁む香、魅惑、繊細な情緒、就中光と色彩の効果への明らかな好みである。ここに彼の方法は時にドビュッシィとその弟子達のそれに似る。だが、此の音楽は極めて音を保持するメロディーの線が主となつてゐて、此の線が徹底的に澆刺顯著な点でドビュッシィのそれとは大いに異なつてゐるデオダ・ド・セヴェラックは南方の国の歌ひ手である。此の人の声は咽喉をいつぱいに開けて雄弁にものを云うには長い楽句を借りなければならない。

彼が労働、種蒔き、降雪、刈入れを描いたプロローグ（地の霊）間奏曲（夜番の話）とエピローグ（結婚の日）を含むピアノの「地の唄」を聞き給へ。諸君は農夫の魂を、大地に対する緊しい執着を、その日その日の労作に辛くも得た楽しみを、その心配を、その信仰を、人生の偉大な神秘に対する敬虔な態度を、お祭りの日の粗野な悦楽を、ここに認め

られることだろう。

ピアノ組曲「ラングドックにて」にはあらゆるピアニストの曲目に位置を見出さなければならぬ三つのピアノ曲——「お祭りの農家へ」「春の墓地の一隅」「牧場の馬へ」——が含まれてゐる。デオダ・ド・セヴェラックの本質をなす驚くべき描写的な力が彼の喚起の才の緊張と相まつて現はれてゐる。「お祭りの農家へ」には、鳴り響く鐘の音騒々しい横笛やタンボーリン、歓声、手ばたき、コツコツと歩く足音が目も眩むやうな華やかさに充たされた場面で、きびきびした幻想と入り交じり、替はり合ふ。「牧場の馬」——何とまた生氣と動き、また心を騒がす驅走だらう！「春の墓地」そのものは悲しみに充ちてはゐない。小鳥の歌には心は慰められる。我々はここを歩き、或は靜に坐るのを楽しむ作曲家を感じる。それはなつかしい瞑想の場所であつて、ここに彼が愛した人達と親しく交通する彼自身を見出し、烈しい悲しみのない、間もなく再会出来るとの慰安を抱いて黙想に耽る彼を感じる。此の墓地は、人生がまだその要求を棄てようとしない他の隅々のやうに、彼の村の一隅にある。ここでは「彼岸」に突き当たる次ぎの扉はまつたく素朴な、殆んど友達のやうな心安い状態をなしてゐる。

小さい子供達の為の微妙なピアノ曲集「休暇にて」がある。目的とするところはシューマンの「子供の情景」を思はせるが、全然違つたスタイル——佛蘭西風である。

我々はまたセヴェラックの手腕そのものが相コントラストする気分——時に生々と、色美しく、愉快に、快活に、時に思ひに悩み、熱心に、力強く——に現はれる度合を評価する為にはピアノ曲集「セルダニア」の「小帆前船にて」と「リヴィアの基督の御前の驢馬曳」とに聴き入らなければならない。

その自然性、その熱情、その光彩、その多種多様、その印象派的な「眼」に依つて、同時にその魂のこもつた深刻さに依つて、デオダ・ド・セヴェラックは「佛蘭西のアルベニス」と呼ばれて然るべきである。

——T・K 譯



セヴラックと私 末永理恵子

デオダ・ド・セヴラックの名を初めて知ったのは、大学生3年生の時のことでした。1学年上の友人が、卒論でセヴラックの人と作品について論じようとしており、その譜例を書く手伝いを頼まれたのでした。

友人は、当初、ドビュッシーについての卒論を書きたい、と指導教官に相談したのですが、「みんな、ドビュッシーをやりたがるんだよね...」と否定的だったので、日本ではあまり先行研究がなかった作曲家を取りあげることにした、と言っていたように記憶しています。最近知った事実ですが、実はその数年前、日本セヴラック協会の山根京子さんが同じ先生に、「卒論でセヴラックを取り上げたい」と相談されたときには、「資料が手に入らないからやめた方がよい」と指導され、やむなく諦められたのだそうです。先輩が蒔かれた種が数年後に芽を出して根付いたようなものかもしれませんが、いま考えると、その間にチックリニーによるセヴラックのレコードが発売されたりしたようなので、日本の音楽界での認知度も上がったのかもしれませんが。

このようなわけで譜例は書きましたが、自分が論文を書いたわけではありませんし、友人の手書きの論文を読む機会もなく、何も知らない白紙の状態でした。ただ、《ラングドックにて》というタイトルの作品があったので「ラングドックの作曲家らしい」と思い、また、小節線のない作品があったことに妙に感心した、ということは覚えています（《大地の歌》の冒頭だったような気がしますが、あまりはつきりとは覚えていません）。

友人の卒論に使う譜例は、提示された出版譜の数小節を抜き出して清書する、というものだけではなく、譜面がどうしても手に入らなかったので、カセットテープから採譜してほしい、という依頼も含まれていました。何曲かのピアノ曲から数小節ずつ、必要な部分だけかいつまんで録音したようなテープを渡され、何度も巻き戻しながら聴音したのだと思います。今年の5月に日仏会館で開かれた演奏会で《鉛の兵隊》を聴いたときは、これを採譜したことをはっきりと思いだし、「まさにこの曲だ！」と膝を打つ思いでした。

さて、セヴラックとこのように出会ったあと、作品を耳にすることもなく何年も経過していましたが、思いがけなくもまたその名を聞いたのは、所属している日本フォーレ協会による、フォーレの生地パミエへの旅行に随行していたときでした。

同地で毎年開催されている、フォーレを記念する音楽祭に招かれ、日本からの数人の演奏家だけで一夜の演奏会を催して地元の方々との交流を果たしたのは、2003年9～10月のことです。出演者の一人であった鎌田直純さんと、作品が演奏された末吉保雄先生が、「セヴラックの生地が、ここからすぐ近くにあるらしい」という話題で、大いに盛り上がっていたのです。採譜で苦労した記憶がいつぱんによみがえってきたものでした。

さらにその後、生地を訪問する旅行の企画が持ち上がっていると聞いたときには是非参加してみたいと思い、日本セヴラック協会に入会した次第です。念願叶って参加した昨年の旅行では、セヴラックの「大地」がどんな風景なのかを実感することができ、距離的に近いとは言え、フォーレが生まれ育った町よりずっと、土の香りがする村であることを知りました。

入会は2006年の暮から07年はじめ頃で、依然としてまだまだ知らないことだらけです。パリの音楽界のような先鋭的な場所から距離をおいて活動した、ラングドックの作曲家の独特な魅力について、少しずつ学び、また楽しみたいと考えています。

第10回例会の報告

亀田正俊

日本セヴラック協会の創立5周年と第10回記念の例会は、いつもと場所を変えて、日仏会館のホールで行われた。しかも、フランスのセヴラック協会からの賓客であり、2007年の「セヴラック音楽祭の旅」で大変お世話になったジャン・ジャック・クバイネ氏とマリー・クバイネ氏をお迎えして豪華版である。遠来の客をたっぶりもてなそう、と例会はいつもよりさらに盛りだくさんのプログラムが用意された。来場者も94名を数え、初めて会に足を運んだ方も大勢あった。

最初はいつものようにフルート六重奏で始まる。石川絵津子さん編曲による《休暇の日々》シリーズから今回は6曲をまとめて演奏、セヴラックの暖かな音世界が、ホールを静かに充たす。通して聴くと、作曲者と編曲者の様々な工夫がうかがわれ、ずっと浸っていたい気持ちにさせられる。

続いて、山田実紀子さんのヴァイオリンと深尾由美子さんのピアノによる、《ミニョネッタ》《セレの思い出》《ロマンティックな歌》。一転して、お祭り好きのカタルーニャ人セヴラックが顔をのぞかせる。宮山さんの楽譜提供のお陰で、フランスでも珍しい曲を、聴かせることができた。

鎌田直純さんと末吉保雄さんによる《フィリス》《終わりなき夜の唄》の演奏は、いつもながら聴き手を詩の世界の深みへと静かに運んでいく。プログラムに収録した鎌田さんの素晴らしい訳文が、曲の理解を助けてくれた。

休憩を挟んで、第2部はピアノの演奏。館野泉さんと平原あゆみさんの連弾による《鉛の兵隊》の演奏、これもめったに演奏されない作品だ。セヴラックによるメルヘンを情景豊かに聴かせて後、平原あゆみさん独奏による《ペパーミント・ジェット》は、これも一転して、陽気で愉快的な酒とダンスの世界へと早変わり。第2部は館野さんによるカッチーニの《アヴェ・マリア》で静かにクール・ダウン。

そして第3部は、いよいよクバイネ父娘による演奏。まずジャン・ジャック氏によってセヴラックの《梟たち》《ある夢》《オーバード》《ノエルの歌》が披露され、オペラの歌手であり演出家でもあるという氏のスケールの大きく表情豊かな歌声に圧倒される。続くマリー氏の演奏によるセヴラック《屋根は空の上に》《山の夜明け》《雪の季節》《子馬の歌》、フェアリャ：《7つのスペインの歌》も、聴き手を強くつかまえて、作品世界へとぐいぐいと引き込んでいく。オック語の演奏は（オック語そのものも）初めて体験だったが、セヴラックの気持ちを直に自然に伝えるようだ。まったく凄いものを聴いた、と思った。

司会の迷走もあったが、かくして2時間40分にもわたる演奏会が無事、終了。しかし長かったという印象はまったくなく、来場者にも大変好評であった。

終演後は同じ日仏会館内のレスパスで懇親会。素晴らしい演奏会の後ただだけに、ラングドックのワインがさらに美味しかったことは言うまでもない。

NEWS

●館野泉さん旭日小綬章受勲

当協会の顧問である館野泉さんが11月3日、日本政府より旭日小綬章を受勲されました。心からお祝いを申し上げます。

編集後記

- ◆本号は、来年1月に生誕100周年を迎える石田一郎さんに、一足早く焦点をあててみました。例会でも、日本近代音楽館で探し出された珍しい曲が披露される予定です。残念なことにあまり知られていない作曲家ですが、これからセヴラックと同様に広く聴かれるようになるかもしれません。初めての出会いに耳をすませてみましょう。
- ◆「音楽の友」誌が、ジャン・ジャック・クバイネさんの5月に来日時に、インタビューを行いました。掲載はまだ未定ですが、決まり次第お知らせします。

セヴラック通信 第5号 2008 後期 日本セヴラック協会 会報

2008年11月22日発行

発行：日本セヴラック協会

<http://www.geocities.jp/severacjp/index.html>

E-Mail: severac_japon@yahoo.co.jp

名誉会長◎カトリーヌ・ブラック・ベレール

顧問◎館野泉、濱田滋郎、末吉保雄、小沼純一

事務局◎伊東美香、亀田正俊、窪田葉子、松田純子

編集：亀田正俊、窪田葉子、山根京子

事務局：松田純子◎〒247-0013 横浜市栄区上郷町 262-32-5-204 TEL & FAX: 045-895-2317

連絡先：亀田正俊◎ TEL&FAX: 042-502-7227 / E-Mail: kameyan@jcom.home.ne.jp

印刷・製本：フェデックス・キンコーズ・ジャパン



日本セヴラック協会
Société Déodat de Séverac - Japon